

## ◆ 『Intelligence』 購読会員の皆さまへ：ニュースレター

### No.24 (2015年2月号) ◆

暦の上では立春を過ぎ、梅や水仙の花の咲く早春ではありますが、暖くなる日もまだ寒い日もある中、皆様はいかがお過ごしでしょうか。さて、20世紀メディア研究所は例年二月には月例の研究会をお休みしていましたが、今月は開催する予定です。寒い中ですが、研究会にもご出席賜れば幸いです。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

#### 【第89回20世紀メディア研究会】(1月31日(土)午後2時半～5時半)

・羽生浩一 (東海大学文学部広報メディア学科准教授) 「外交機密文書から見た佐藤栄作ノーベル平和賞受賞と「二つの中国」問題」は、1974年の佐藤栄作のノーベル賞受賞をめぐる、その決定の過程を英国公文書館等で発掘した資料に基づいて跡付け、平和賞をめぐるノルウェーおよび日本や英米各国との間で展開された政治的な文脈の再考を論じられました。

・上田学 (日本学術振興会特別研究員PD) 「初期満映の映画史的評価をめぐる」は、1937年に設立された満州映画協会が発行した『満州映画』という雑誌全33冊に基づいて、当時満映が併設した演劇訓練所で養成した女優たちや、その後に発行された中国語の『銀星点々』『電映画報』などとの関係を含めて、甘粕理事長が就任する以前の初期満映の活動を語って下さいました。

・下田太郎 (氏家喜連川歴史文化研究会 (栃木県)) 「記憶を記述することと検閲—GHQ占領期における江口渙の作品について—(教授)」は、大正期にデビューし、童話作家でもあり、社会主義思想に接近し、日本プロレタリア作家同盟中央委員長になり、治安維持法違反で検挙され、戦後まもなく日本共産党へ入党し、新日本文学会設立へ参画、中野重治らとともに日本共産党中央委員にも選出された作家・江口渙が占領期に刊行した作品と検閲について、プランゲ文庫や江口の書簡などの資料から論じられました。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされてい

ます。 <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の 20 世紀メディア研究会は、2 月 28 日(土)で、北村匡平さん、高光佳絵さん、白山眞理さんをご報告の予定です。その後は、3 月 28 日(土)、4 月 25 日(土)を予定しております。なお、NPO インテリジェンス研究所による諜報研究会は 5 月に開催予定です。また、ご報告御希望の方は、20 世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

### 【気になる新著紹介】

Tomoko Akami, *Soft Power of Japan's Total War State: The Board of Information and Domei News Agency in Foreign Policy, 1934-45*, Republic of Letters Publishing, Dordrecht, The Netherlands. は、同盟通信社と情報局を中心に、総力戦における日本の外交政策における情報とニュースをめぐる「ソフト・パワー」を論じた著作。貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史-国交正常化と通信の再生』(吉川弘文館) は、1972 年の日中国交正常化をうけて、1976 年に開通した日中間の海底ケーブル敷設が共同事業としてどのように進められ完成させられたのか、技術的・物質的な解説も含めて記録としてまとめた書。奥武則『ジョン・レディ・ブラッカー-近代日本ジャーナリズムの先駆者』(岩波書店) は、幕末明治初期の新聞人ブラッカーの生涯を、英国での史料調査をもとにルーツのスコットランドから丁寧に書き起こした著作で、ブラッカー評伝の決定版。青木淳子『パリの皇族モダニズム』(角川学芸出版) は、「領収書が明かす生活と経済感覚」とあるように、東京都庭園美術館に眠っていた新史料から 1920 年代のパリに滞在した皇族たちの様子を描き出した書。福井健策『アーカイブ立国宣言』(ポット出版) は、日本のナショナル・デジタルアーカイブ設立を目指す提言と実践例を盛り込んだ現状報告集。

### 【コラム：風刺画雑誌とシャルリー・エブド襲撃事件】

2015 年 1 月 7 日、年明け早々に起きたパリでの銃撃事件は、表現の自由と風刺画という問題を改めて提起することになった。イギリスでもアメリカでも欧米各国では、さっそく「私はシャルリー」というスローガンを掲げてデモに集まる人々の姿が報じられたが、日本ではどうやらそのような行進はなかったらしい。台北ではデモがあったようだが、ソウルやバンコク、上海でもそのようなデモはなかったようなので、アジア各国の感度は、欧

米各国とは異なっていたと言えよう。私自身もそうしたデモには何となく違和感があった。

折しも私は大学院のゼミで『Asian Punches』という書の中の、中国で20世紀初めに刊行された風刺画雑誌に関する論文を読んでいたのも、学生たちと少し議論してみたが、「表現の自由」という概念の背景にある宗教との関係は、ヨーロッパの長い歴史を知らないとなかなか十分には理解できないと改めて思った。神をはじめ神聖不可侵といわれる領域に立ち入り、他人も自己も笑い飛ばす風刺の精神は、近代ジャーナリズムのもっとも鋭く危険な最前線であり、その毒は信仰に命をかける人々には許しがたい邪悪なものになる。もちろん暴力による報復は許されないが、しかしヘイトスピーチのように他民族や他宗教を侮辱しあざ笑うだけの表現もまた許されないだろう。特にイスラム教においては、どのようなイメージであれ神の偶像を描くこと自体が冒瀆であり罪なのだ。

風刺画専門の新聞雑誌は19世紀初めにフランスで誕生し、英国や米国などで広まり、インドや日本や中国に移植されて、『Punch』や『Puck』を踏襲したさまざまな雑誌を生み出した。日本で「ポンチ絵」という呼称までも生み出した英国の『Punch』誌は、最も長く1990年代まで存続した。(余談だが、1996年に『Punch』の誌名をエジプト人実業家モハメド・アル＝ファイドが買って再興したが、結局うまくいかず、同名の雑誌は2002年に廃刊された。このアル＝ファイド氏は、1997年にダイアナ妃と一緒に交通事故で亡くなったドディ・アル＝ファイドの父である。) これらはもともと旧体制や権力を批判するための出版物だが、風刺画雑誌という表現自体が、ヨーロッパの歴史が生み出した文化の一部であるということも考えなければならないだろう。

[2月22日付文責：土屋礼子]